

地震災害を専門とし、本県の防災研究などに尽力した弘前大学大学院地域共創科学研究科長の片岡俊一教授(65)が今年度末で定年退職を迎える。同大で2月28日、「青森県の地盤と地震動—地震災害軽減のための基礎資料—」と題した最終講義が行われた。片

弘前

岡教授はこれまでの研究成果を紹介し、24年間の大学教員生活を振り返り「学生の努力、家族らの支えにより、研究テーマの地震・防災をはじめ、防災教育や構造物の応用など、自由気ままに研究に取り組むことができた」と締めくくった。(稲葉智絵)

地震災害専門 片岡弘大教授が最終講義

最終講義で本県の地震災害に関する研究成果などを紹介した片岡教授



24年間の
教員生活
「学生、家族ら支え」

最終講義はシンポジウムに就任した。

度観測の変遷を紹介。弘前

片岡教授は埼玉大工学部建設工学科卒、東京工業大(現東京科学大学)大学院総合理工学研究科修了後、清水建設に入社。同社に勤めながら同大で博士号取得。2001年に弘前大理工学部の助教授に着任し、大学院理工学研究科准教授、教養研究自然科学系教授を経て、18年に理工学部地球環境防災学科長、22年に大学院地域共創科学研究科長に就任した。

「地域に即した地震災害軽減を目指して『能登半島地震に学ぶ』の基調講演も兼ねて行われた。受講した学生や教職員、卒業生らが熱心に聞き入った。

講義では、体感で計測していた震度を機器観測とす

本県の防災研究紹介

大着任後の研究成果では、全国に先駆け提示した本県周辺の地震観測点(123点)の揺れやすさや地形の関係、ボーリングなどによる地盤調査結果を解説した。県内の地震動の特徴を踏まえながら「統合新病院(県と青森市が整備予定)など重要な構造物では深い地盤構造を踏まえて耐震設計を行ってほしい」と結んだ。